羈旅湯錄

中之卷

ル 4
3377
2

ル 4
3377
2

ルロ
421
2

壬戌羇旅漫録巻の中

蓑笠漁隱遺稿

坦庵居士正幹校

(四十一) 光廣卿の寛活

烏丸光廣卿の宅ハ。烏丸中立賣ふ(ひ)りゝ。そのころ牛飼ども。公卿の家ゝ牛を牽ゆき。御用なりやと問ふ。用あるべとゞめ。用なけれとゝ。このつゝ。光廣卿を毎度この牛を雇ふゝ。花街ゝこのよひ。ひねもすひぬ。車の上ゝ檀を敷その上ゝ酒肴を設け。自若とゝてかゝるひ移ひ。とぞ。松波播磨守光奥活 江戸あそむの馬をゆゝ

ゝ。とゝ。ゝ。ゝ。

〻〻京職ハ補せられ在職三十四年明暦二年十二月卒年七十

〻〻野の傳と兩談ハ載られ

〻〻。制度の害ハ多〻〻ふもられたり。その頃まを
ハ。政もゆるやかふ侍り。同人話この二條橋本経亮来て〻〻もり

(四十三) 六條郭の全盛

板倉侯洛中通行の日。攝家の女中乗物ふあふ時を。毎度酣酔
せらる。或日〻〻と例の女中乗物ふ行あひぬ。侯馬をとゞめい
づもこの北の方あやと問〻む。従者おそもて〻。是ハ太夫ふくい
と答ふ。侯大ふ怒り。そべ〻〻遊里を洛中の中央ふおく故ふか
るゝハあるべきを上ふ請ふて。郭を片隅へうつさもれ六條
のころ遊女の全盛。こもふ〻〻ありべ〻。橋本経亮話

(四十四) 傾城弓の券書　此條兩談ふ載られバ省く

(四十五) 烟火城書畫展覽目録　上ふ同〻

(四十六) 遊女〻〻野が傳　附蟹の盃

ども漏せ〻所もあるべ〻ハ。蟹の盃圖説のこと記ハ兩談ふ悉〻られバ就てそなべ〻

橋本肥後守経亮ハ香菓園と号し京師梅の宮祠官なり。宝物の典故ミらし。文化二乙丑六月五十余歳ふて没を著述ところ梅窓筆記二

吉野没年ハ寛永八年。六月廿二日なり。〻〻野を佐野紹益ふ
請出さる。紹益ハ灰屋と號を豪富なり。吉野ハ紹益ふ先ざち
を死す

都をハ花ふ紅里〻〻ふ〻〻〻吉野を死ものふ〻〻〻を　紹益
もとその時述懐の歌ふり。或人云。吉野が屍を火葬〻〻。紹益
〻〻〻〻こもを喰ひ盡〻けり。紹益が〻〻せふ愛着せ〻〻か
らの如〻。是〻〻〻を灰屋の家おくるといふ。經亮話

七月十七日　橋本経亮とともふ。榮庵を訪ふ〻面會〻。吉野が
傳を問ふ。榮庵ハ佐野氏。京都兩替町二條下ル所ふ住居〻。医
を業とす。この榮庵ふ〻野が夫紹益の孫なり。今おくるく〻
寒家とかりぬ。栄庵云。祖父灰屋紹益が家ハ。智恵小路上立賣
ふ住り〻。紹益ハ和歌をた〻〻。蹴鞠茶の湯ふ〻ぜり。尾州紀

巻世ニ利布モ

畸人傳ニあり諸侯いりてぼつぞふくばかふまゝえたるひくいのるゝぞよろこぶつゆりのとあさつぞやと栗ゞたまひ〳〵小紙色紙のうちふ後成卿の歌世の中よ花とそなけれとふなの四の句山の中まゝ〳〵誤りるゆゑかつて山中の色紙と云傳へて名物とあるなを絶るあるまたしてまたいふくよろこひけるとあり云々

州の両公へ召もく〳〵度々出ちるよう〳〵承り伝へ。吉野没〳〵をもるか後。浪華の小堀氏より妻を迎へたり。おゝもる子ふく。七十三歳の時。妾ふ男子出生を。今の栄庵の父紹圓是なり。紹圓五十餘歳の時栄庵出生を。栄庵も六十歳ゞてのうにえゆ。紹圓も鞠をこのゝ〳〵〳〵ぞ。ゝれ家よゝ〳〵の川の裂。山中の色紙蟹の盃あり。いづもも吉野より傳來の器物ふり。栄庵よいゝをを〳〵〳〵窮をゝをとの〳〵。よ〳〵の截を（よ〳〵の截より漢東こゝを）人ふゝりのゝ〳〵ぬ。山中の色紙ハ雲州侯へたゝゝすつり。今家ふあるもの蟹の盃のゝ。又よ〳〵野紹益ゞ書〳〵ものいろ〳〵あり〳〵ゞ。度々の類焼ふう〳〵ふひ。又ハ人ふのぞすもて〳〵今をなゝとゝふ。二代目よ〳〵世ゞ文あり〳〵をゝをせたり。紋所の印ハ（如此一ッ巴の）うちふさゝゝら紋花ふり。手跡も又ゝ事ふり。山中の色紙。廣東

の横蟹の盃ハよ〳〵野花街ふあり〳〵日。薩州侯ようたまもり〳〵ものふり〳〵ぞ。

栄庵又云。紹益ゞ菩提寺ハ。内野新地立本寺（宗日蓮）よりの。今出川町ふあり〳〵ゞそのち御用地とふり。今の地所よ引けもゝ〳〵時。墓も建〳〵ものや詳あら〳〵ぞ。石面ハ紹益と吉野と戒名二行よほりつくあり。紹益ハ八十一歳ふ〳〵没〳〵ぬ。

古繼院紹益　元禄四年十一月十二日
本融院妙供　寛永八年六月廿二日

〳〵ものとりて考るふ。吉野没年ハ。紹益廿歳の夏ふり。ゝもべよ〳〵紹益ゞ婦〳〵ふ〳〵程ふ。〳〵〳〵〳〵ものあるべ〳〵。うべふり紹益ゞ玉を〳〵ふるの恨前の彩を

吟ドてゝ。ちゝ。ちゝ。と問しゝふ相違か。紹益い貞徳と友と
榮庵ゝ紹益が歌のゝ
しゝようゝもしゝとぞ。

畫工成瀬正亂の話ゝ。紹益ゝ一世とうけ出せし時。父ゝ勘當
せらるゝ。ちゝらゝ下京ゝ家をもゝめゝ夫婦住ゝり。父他へ
ゆきゝゝつゝき。雨ゝりゝもゝれゝかゝゝゝれ家ゝ入りゝ雨舍
りゝ。うちゝゝ爐ゝ釜をうけゝあり。主人ゝ留ゝゝゝゝ女
房のいゝゝゝゝゝゝきゝ。ゝれゝて請ゝゝゝ茶ゝゝゝ出し
ぬ。その爪ゝつゝ茶の手ゝゝゝ所ゝゝあゝゝざるゝゝゝとゝふ
しゝゝゝ思ひあゝゝら立ゝつゝて。次の日ゝゝゝのゝしゝ人ゝかゝ
るゝふ。そゝゝゝゝ子息紹益が妾ゝゝ。その家を紹益のかゝゝゝ
家をゝゝと告ゝ。父ゝゝめゝゝゝゝゝ。そゝ奇遇を感悟し

遂ゝ紹益が勘當をゆゝゝゝゝ。ゝ野を引ゝゝめゝゝゝゝとぞ。
程遠ゝゝゝぬ下京ゝ。その子の忍び居ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ豪富
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

戊午の年出生。行年三十六。畸人傳とつふこのふ載さるもこれふ同じいつもごいづもこれ是ふもとあるべし。

又洛の立入氏賀樂老人より告來る。吉野没する時紹益三十歳ふり。八年ふ〳〵ハ二十歳ふり。然もこれ十七八歳ふ〳〵より野と購たるもの。法名前文の通ふり。壇上の三門を吉野建たり。後ふ火ふ焼く改め建たるもの寺僧語もり。栄庵が説ハ心得ちがひふり云々

追考。嶋原の郭ハ。寛永十八年六條柳の馬場より。今の三筋町に引けふり。より野を寛永八年ふ没せ。あるのもこれそのころい猶六條のくるいまく侍り。箕山が色道大鏡ふ。より野が傳あるもの。大坂盧橘ふるもり。予大坂逗留の日數總ふるをもり。寛文式二巻を閲じたるものこの序ふ〳〵併せ勘

追書
解按そもふ紹益ふ伝ふ〳〵草ふ載たる輙書記のふり〳〵ふ又ハ〳〵ろ〳〵の鳥ふこなり〳〵ふ。ふ況ふ〳〵ハ云々との公歌ふ異同あんとをいふとの考ふ

箕山ハ通称と藤本ふ因と云貞德門人ふて西巴危言好色大鑑ふどたら〳〵ふ人ふり

一眼千軒ハ嶋原の細見記ふり

あべし

四十七 嶋原の噂

嶋原の郭。今を大ふ却て〳〵。曲輪の土屏ふど壊と倒と。揚屋町の外ハ。家もちも甚ざきたふ〳〵。太夫の顔色萬事祇園ふ却て〳〵ふ。中〳〵祇園の及ぶ〳〵ふ。京都の人氣の温和古雅ふ〳〵ふ。中〳〵祇園の及ぶ〳〵ふ。京都の人を嶋原へ道遠〳〵て往来ふづら〳〵ハ。ゆえふ多〳〵ハ旅人を〳〵祇園へ誘引を。角屋徳右衛門が坐鋪庭等最〳〵この庭の松甚よろ〳〵。松のもとを紙ふもり。求むる人ふもべ〳〵〳〵侍る。その外露臺ふどある揚屋もふり一眼千軒ふくもけもべ略を

嶋原ふ〳〵。太夫をかり〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ

來る。大〻〻大坂まゐるべし。〻〻〻

扇九。一カ。井筒ゑど茶屋をたまい何屋と定めゐ〳〵あり。抱のげい子もあり。又志すゝのげい子い別よ家ありて住もゐのもど客あもべ必ぞそのえ世くいふ〳〵やる。子どゝ屋を別まあり。是い祇園町中廿七軒よ限りて御免ゐり。こもも通りえ世とつふ。又もゞめてつゝめよ出るゐのを。腰元ゐり。てゐけゐりとつふ。江戸よて〳〵何あゞもとつゞ如し。又いゝゐ横ゐどんゞ何屋の仲居ゐり。ゐゞもかゝゐり。

大酒家の肉桂除風呂てはどんゞ
ゐゐ子　みゝ　半　ミセ

房中ノ秘
本詰　ゐ　かう　いのうつや　アタヒノ高下

三條通りさるゝてゐけゐり
中詰　いと　わるゝしや　ミセ

ミヤコ名産三條揚弓場娘出
振袖　つゆ　あゝゝや

本詰とい。本どゝは眉毛ゐゝ。中詰とい。中ゞゝまをり。げい子ハ少よ拘ゝゝゝゝゝゝ云祇園町のげい子いゝゝゝゝ。おやまいおゝゐり。げい子よ勢ゐりゝ。ゐゐゐの上坐をゝる。初會の客よ盃ゝふし。ゝゞふ客のゝゝゝ来ゝゝゝる。ゝゞもかゝのゞゝ

五十　嫖客の噂

京を女郎といゝゝゞ。女中ゝゐゐまとつゝゝ。目下の人よりいゝゝゞ。ゞゝゝやとゝゝゞゝゝ。げゝゝとつふ。夜ル五ッ或を四ッ時ゞゐゝゐり。ゐゝゝ。花いゝゝつと仕切を。相場をまゝゝゝふ。花入用とも二割引ゐり。宿屋ゝゐり引つけゐる旅人ハ二ゐり半引せて。半ハ宿屋ゝゐる。銀相場を六十三匁通用なんゞゞ。地の人ハ六十五六匁まを勘定ゝる。

京ゝ現金の客をきゝふゝゞ。ゝけハ五節句拂ゐり。そもゝゐ才

分よくしき方へ。勘定もゆるやかなり。夫ゆゑ日もをくぞをひ
ゐることあるこのふをもふてもゐ損をもることに稀ふるもの
但勘定をよくもる所ふり

（五十一）きぐへの譯

祇園の客。茶屋へゆきて酒をのまば。期よりあやまりとよび
直よぬるを。きぐへまゆくといふ。期ふ夜九ッなり。期ふぞと
も。きぐふぬるを。きぐへとのふ。げん子ねやまるにやくそくと
のふ。晝を朝より暮ゆぐ。夜をくもより夜明まぐかのこをる
ふり。ゆゑ日乃仕舞とのふ。これやくそをねぐら
きるこのり。大坂も又ねをぐ。

（五十二）藝子の枕金

げん子ふまくぐ金とのふ。是ハげん子の誰ゑ通ぜんと
ねのふ人。茶屋へゆきくそのこをたのめば。茶屋その名をゆ。
あの子の相場を何程ふ。相場とんたくば顔色ぐ
きくこのふ。名ある歌妓ハすくく金二十両。或ハ三十両。その
次ハ十両十五両。いまくあ。まくハ五両三両ふり。三両より下ふ
るもの。すぐあふ件の金をゆくくこのふ（二十両のまくば金ふハ
ゆ十両ふ通ぜ後又十両ふ）ひそくよ茶屋へよびくあふり。但あふ
ふ花ハ別よもらふ。ゆゑを枕金の相場とのふ。仲居或ハ茶やの
娘。舞子も同様ふり。

（五十三）舞子の評

舞子を十歳ぐのこより十八九まぐふり。歌曲も雅ふ。三
絃も煩ゆ。すぐ。ふくやふ。ふくち舞ふ。ゆ。ふ。
この白拍子ゆ。朗詠ふぐふ。ゆ。ふ。ふ。ふ

追出
挂窓云ふろ
覆そ二斤ホ
ちりめんの紋
とつけるりの
とまあれ

とぞおのもる。

五十四 三絃筥

げん子の三絃筥ハ。木地の桐の名あり。風呂敷ハ包む。三絃ハつゞまるつぎ棹あり。故ハ箱を四角ハ横少〳〵長〳〵探袋い撥のうちあるる。盆のまぬりを用ふ。琴ハふろ〳〵もふ包を。鼓ハ〳〵ぐをうゝ〳〵携へ出る。

五十五 妓の衣服

衣服ハ。妓ハ紫の絽の袷帷子。り〳〵色の裾うら。すそりやり。或ハ上布のうぐひら。ちゆぐん縞ちりめん等ハ。うら布をまぐんなど前へ引こく帯ハ赤きぐ多〳〵。ゆり〳〵ハ緋ちりめん。○げん子ハ上布。ちたやちぐ〳〵。紫の絽。きものやうまもあり。繻半ハ長ど。茅ハ袴づゝ。湯子多〳〵。ゆそぐハ〳〵ぐめのちりめん。つゝめのゆり〳〵緋ぢり

めんハ稀あり。京ハ大坂ハ。郭の外ハ。こぶ左のまゆてつまをる。くゝもものあるうゝふをる。是おろ物ふのあるゝ。そのつまハ。甚泓手あり。ぎをん町五月毎日より七月十八日すでをろひるの夕を焚るこの時茅いひちりめんよぬひあどちろとちめるるこれハ茅平汗ようぐるゝ色ぬ紋ハ紋ハ茅ひちりめんの茅を用ゆをろひのうちハひぶゆをの茅あどゝるもまれハ行り

五十六 妓楼の夜具

客のゆるゝハ茅屋まゝゝちをり。妓ハぶんこふ多ぐをいれて。のち来り。閨中ハ江戸染のゆるゝあどをる。扇ハぬりわゆの浪扇。うちをいろぬり紙ハ草團扇をもつ。郭の揚屋祇園町ハ。夜具ハ。郡内縞のうきれふろ〳〵ん一ッあり。大坂ハ又同〳〵祇園新地ハふと織の蒲團。茶屋よりて木綿夜具をハ用ゆ。太夫ハ伯人ハ夜具を皆かゝのぐ〳〵。

五十七 京の女兒風俗

京の女の風俗。髪をあぶらをもつてつけ。髩を上へうづ巻上げ。髩を甚あぐるく出す。ほげいもしくつ。山をべつたりと前へたふしうけ。島田をまんを入まぜ。むすびもとくさ草をぬふ。髪つきを太きまるくを紙まき巻き。うるしあてぬくるとのちなり。

まつぶくん一寸半ほ
きりてぶらりとさげあ
くるべのうしろけめ
ものなり

きべくく大坂名古屋伊勢いづもこのくづひふく。大同小異
なり。大坂も水髪ものもどく。髪へむすび多く油をつるるいせい丸
く。名古屋は似くく非なるもの多し。京都は地の女も髪の風。妓
とかくくもつとも。これい商人と妓とうち混じくく居るなり。
化粧はつぶまもあつぐせうなり。櫛は厚き高蒔繪のぬり櫛
あり。大坂はづつ笄は鼈甲あり。数本さしけるが今年制禁あり。
三本の外はさしぞ。髪結のあぶるまばふしのちりめんも今年禁
制せくるよりく紙をもくくちりめんのくく染くる髪結を
用ゆ。前は髪の上。数十金を費せくとつ。
妓を紙入ゆ紙つぶいの鏡をつけ。白粉をちひきあるなきれ
袋ゆ入。席上あくたびくけまるをまるすうぶの子は巾着と
つけくまを帯のうちくうくくくくくの袋の中ゆ化粧道具

ありこまも席上まくたびく〳〵臉を摸も鏡を懷中もすること
歌妓も又同じ。

五十八　祇園大樓の噂

井筒扇九一カあど。坐敷廣し。客あもバ庭へ打水し。釣燈籠へ
火を點も。忠臣藏七段目の道具建の如し。燭臺ハ木ふくろぬ
もあり。大樓ハ燭臺四ッ五ッ。蝋燭を六寸ぞりあり。まかたぎ
るうちとりつるもそれとびく〳〵ふ必客の顔の色が變る。蝋燭一挺
八分ッ。あもびわり。もべく茶屋よりかうみいくつもありて。服差ハ
枕上の床の間へうぎりわく。大坂も又くのごとし。大坂ちん町あけやハ
是相對死などつもこへくなれねあり。古市ハ近年油屋騷動
ものく。客の服差を内所へあづること江戸のごとし。

五十九　祇園の方言

祇園町の方言よ。江戸まをつやをいふせどをいふといふこと。
あぶくをつもこいふ。ふぐん來る。だやうぢう來る。ふぐこいふた
もを。つくふおいぢるこいふ。まつるを糸じるよこいふ。又
かつふこいふこあり。「これいこうこうこいふこけやかいふ。さやう
くふを畧せり。おもこちいおわく。これ外いくもあるべし
もべく女をふこいふこもをつくいふ。
ヨーがくふ。かくあらつてふ。こんこあちんきんいあ〳〵
てふ。つろ〳〵おさでやくもどふ。おちこおまるきんこんこあく
もをくこいふ。「ふらふあぶくもいふ。「ふんのいふ。つくこうこうでけ
ふくもをいふてやいいふ。又めこをころこいふこあ魚きこ
ひくありくゆあるあり。かくやのこくこのあをせん
こくもの為。おぎやにもあもびのでんぐ。
大うこかくつのごこ。江戸ふくいつこうこいふこ。ふる化ここふ

のゝ〳〵つゝいつて。京よりいよ〳〵あるゝあもいつてゝゝゝん。いつてゝゝ
ゐゝのゝといふ。又茶屋の嘸をゞつきんとつく。江戸吉原まるを
茶屋の亭主をゞつさんとつく。男女のゝゞひわり。「さのゝゝゝ」といふ
詞を。ゆゐよとつふゝ和あゝ。江戸いかゝゝとつく。歌まもふゝゝゝふ
といよあゝ。ふゝさゝゝふゝよゝいよゞゞ。これゝゝもゞや。京なまゝゝゝいふ
べき
文をぱゞあてゝこゝます。ぱゞ風とゝく。いせいゞ家かとゝく。ゝゝいつでも
あゝゝゝまゝなゞゝゝ通り句也。げんゝゝふ子の礼文いゞひいきねゝひ上
ふ。むんあゝゝもゝ出ゝゝせふゞゝ出ゝゝ。茶屋のかゝゝりあゝをふゝん。
ゝれゝゝゞゞが通り句あり。

(六十) 祇園の歌曲

今祇園ふゝくりつゞゝらゝゝゝる小唄を。人のゝゝひゝゝきゝゝせゝ

ゝゝふゝ〳〵ゝゝを。

扇手びやゝゝ〳〵 二上りこれいにはゞ京ぶしそゝゝゝひ
ゝゝゝつまわゞりのふゝふ仕ゝゝり
漂ゝらのサアヨウ〳〵ヤレちゝうの姫ゝ月ふハ九ゝんのサアヤレ月すハ九ゝん
のゝゝゝをゝりまゝをサアヨウ
ゝゝのゝゝゝをサアヨウ〳〵ヤレつゝゝさゝゝらゝてゝゝゝやをたのんぐサアヤレゝゝや
をゝゝのんぐゝめふゝゝふゝをサアヨウ
ゝゝゝえハサアヨウ〳〵ヤレむめのゝゝりゝんぐ三月さゝゝらのサアヤレ三月さゝゝらの
さゝゝゝゝゝゝをサアヨウ
ゝすゝハサアヨウ〳〵ヤレあゝれゝやゝのぶゝゝうさゞゝのちゝんちゝとサアヤレうさゞゝ
のちゝんちゝゝゝねゝゝゝゝをサアヨウ
下まゝハサアヨウ〳〵ヤレゝゝゝとあゝすゝゝとあゝすゝゝゝんとゝゝとサアヤレだのゝゝゝゝ
んぐゞねゝゝるゝゝゝゝをサアヨウ

同手びやゝゝ〳〵 扇ハあゝ〳〵これいこゝふぶゝせ
ゝゝゝゝゝゝ

いたちぶし　ちりごろ江戸より流行せし

孫〻踊ごけ〳〵こまをあそばせ〳〵むまごべいごけヤレ〳〵十二孫〻入ごけヤレ〳〵

孫〻踊ごけ　おあぐごべいおけ〳〵こまをあそばせ〳〵十二孫〻入ごけヤレ〳〵

いつかのころもころぬりころのころ　いろりこちのねろりもころぬりころねろりヤレ〳〵

いとかりのちやぐすいころぬりころのころ　ねろりこちのちやぐぬもからころころちやぐまヤレ〳〵

ゐぐ〳〵ふうけこる大あぢあ〳〵たまぐるぢあてこぢやヤレ〳〵

むさ〳〵坊ぢんく〻い大あぢあ〳〵たけも八尺こも八尺ヤレ〳〵

むろ〳〵〳〵　今ふ妓うあ〳〵ぢをこまをうふ

むこのし〳〵山のあ〳〵ふあ〳〵ぐけみぢぐのい山へまぢろりふぢさぬい川へせんろ〳〵

ふるまちふまぢめぐたあのとのぢをのこらぢこ〳〵ぢすひぢさぢゆいこるありまちをこ

こてぢこ〳〵ぢりまぢめぐ〳〵わひこあつぐぢぢのやつえろぢのこ〳〵ぢでぢのりをこるまぢ

めどのいこ〳〵らしやぐぢこらぬこ〳〵チョッ〳〵のこへやまこへさこ〳〵ころてゆさこのあ

かやぢの〳〵ぢこへあ〳〵やるのこ〳〵ぢをうちふゆぢいかこ〳〵

のりのいなんぐぢぢるぢれこ〳〵りやぢ日本一のきこ〳〵ぢんぐひこ〳〵ぢぢされやこるヤこふ

今まこ〳〵このぢけのこんぢこ〳〵りぢ。ふこちぢふこ〳〵ぢこのりのどもぐつぢをひ〳〵ぢこ〳〵ぐ〳〵ゆく

かこ〳〵ぢこ〳〵りぢエイヤアねんのふあやのこ〳〵ぢぢをこ〳〵ちあみせこ〳〵きんいこいかせこ〳〵といちと

い〳〵のこのあの〳〵　これらいこ〳〵ぢさいぎなこり。めりやこい琴歌は河東

そのこりあるる。

を加味〳〵たるやうふこりのこ〳〵玉雅あり。大坂むこ〳〵。京い

大坂をまあべり。又江戸の大こ〳〵舞のふ〳〵ふ〳〵。りん句い徘ら

ぢ時ふのここふあ〳〵〳〵ここふあり。江戸のぢ〳〵ここ多こつ

らぢ。ぢあ〳〵〳〵。

（六十一）御所うら

京あ〳〵ゑ世付ある妓楼を。縄手。二條新地。北野。内野。御所うら等

あり。こまちのづまちゑ世をもる。いづまも賤妓ようゑ世をいう

ちつけ格子疊ゑづこふ三四畳と敷べ〳〵。二條新地尤多〳〵。御所

裏いむ〳〵御所の下主女。夜行〳〵色とうゑ〳〵。今いかゝる

こいあ〳〵とつふ五條坂等もゑ世付あり

（六十二）つ〳〵ぢこ

先斗町ぽんてゝまこと称ぢる私窠あり。こぼ〳〵とも名づく。

むこ〳〵ぢこぼ〳〵やこ〳〵この妓を出せ〳〵とつふ。今猶先斗町の北

角ふ綿帽子屋あり。此綿帽子を旅宿へまねく。又この堂浦へ月

雇ふもまれなり。價つゆ〳〵紀醜婦あぐら。その名を雅ふきこゆを
べ〳〵旅人逗留中。一ヶ月ふ金二分を費せば。一月雇の妾あり。その
者飲食ふ給仕し。又縫刺のこゝをなし。夜を枕席をともにしるふ。
是を素人あり。この地尤荒淫あり。太夫天神の外を房中帶ふし。
こゝを衣服をいとゆゑあり。太夫天神のくちりめんのたぐ紀あり
をきあり。大坂又〳〵のごゝ

(六十三) 總嫁

總嫁を二条より七条
までのゝ〳〵いづる。
河原ふむこゝろこのまひ
〳〵こゝあ〳〵夜合を

物嫁の小屋

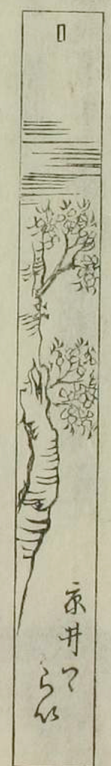
河原の水ふ紀所ふ石を高〳〵をのうつり
むこゝろこひ 三尺を一間
をるるりひくいとり
ぐ〳〵せ又夜ハ小屋
をうける物嫁ハ川む
ふたゝをを居て
往来の人をひ〳〵

(六十四) 四條の芝居

京ふ〳〵芝居初日の前日ふを。小路〳〵へ太鼓を廻せこと江戸
の角力の如し。太鼓を大太鼓ふ紀ぶてん〳〵〳〵をある
をのあり。芝居をもつ〳〵朝やぐ太鼓
らふ〳〵この太鼓を打
の先ふ棹ふ紙をもつけ。役ふ
書ふ〳〵をあをを荷ひあり〳〵。その
〳〵ち圖のごゝ

四條の芝居二軒 江戸木挽町の芝居看
板を江戸の人形芝居のごゝ〳〵むも
奇麗あり。芝居のうちふ厠あり。花道ハ真をぐふつけ〳〵つき
ゆ〳〵ふ切幕あり。又舞臺の左の方ふも切ゆ〳〵あり〳〵役者
あ〳〵ふも出入を。切落のうつふ簀の子天井あ〳〵。切落ハ土間

あり。大入あるまぐちの呼も桟敷並まある。上下の桟浦を江戸よりも廣く。一ト側九間まぐらぐら形等のうゝ江戸よりハ立派あり。桟浦の向ふづらゝ形等の祇園のげハ子あやまようわゝゝ物あり



桐の木地の枡へまゝあり〻ぢをぞさゝ〻ぢ物の畫あり下へけのこ物まの名をしゝるを

幕を横布あり。水引ハ四方ゑ張ゝあり。二階さゞ物の上ゑも水引あり花道を十五六年以前まゞハ土まゝ築あげあゝゝよ。今ハ江戸のゝゝ枡ゑゝゝゝ。弁當を

如此ろぬりの屋んとゝゞこへ入ところへ枡をそゝ〻持ゝ来る茶らゝ一番附等うゝものハ皆十四五歳の童あり。雨天の日ハ茶屋の下女草履を持来ゝ客ゑゝゝおき。大切りゑ又下駄を持て迎ひゑ

来る。又客の貧富ふゝゝゝ一幕〻〻ふ下女来ゝ〻用をさた。芝居のうちふ厠ハあり。見物のりの外へ出るふわまぐ。又闘諍の愁もふ。桟浦まを

かゝのゝゝき桃灯を桟敷のおまてのゝあり。こゝをハ朝桟敷ゞゝゝまぐ直ゑその茶屋〻ゝゝかゝるとゝゝゝり。凡芝居の弁當ゑ焼飯握りめ〻ハあり。京も大坂も雑劇と妓院と打混ゞゝ居るゆゑ芝居の仕出〻も多くハ祇園の茶屋ゑり仕出を。芝居茶屋といふもの別まあり。初日ゑり四五日まぐのうちげハ子ハやま等ハゝゝゝゝゝゝゝあを。一日もまやゝゝゝゝものを全盛とまゝる故ゑ當分ハ桟敷のうち悉げハ子あやまま多〻。妓を必ぞ客をねゞゝる事妓ハ十人廿人講をむまぐゞゝ自分ふゝゝゝゝもあまゞ見も多くハ客をねゞゝなり

追書
伏見おあらぶ高槻喧嘩を
くり組る狂言あり、其の狂言を高槻騒動と云へ

ちべく舞臺のちらけと役者の衣服を江戸より立派あり。その外を替るあるべし。予京にあり。時七月廿四日より四条北の芝居もちぶする。團藏。嵐吉。嵐吉三郎ありこれも当時のべてりのあべ上手べ淺尾工左エ門。嵐三五郎。嵐猪三郎。嵐吉凡市川團三郎。前髪をちちり淺尾國五郎。尾上新七。鯉三郎子澤村國太郎。甚老年中村金藏。芳澤いろは。女形さてりの市川團之助。團蔡子女がた等にて繪本太閤記の狂言あり。切狂言は伏見の喧嘩をくりべ新狂言三幕まで。嵐吉三郎足輕里見伊助の役評判たべ大入あり。予は八月七日大坂より帰りぶけよりあもて。京大坂にも芝居もちぶする以前先づ板に役者の名を書つべくこもを木戸に出す。江戸のあやつり芝居のぶ。是は一ト芝居〳〵に役者入くちるめるあり。近年京も四条二軒の芝居一所まい出来ぶ。うつべぶに興行を。或を京のあくり狂言を役者道具建このに大坂へもちめぶべ又興行をるこもあを。大坂にて又かべのぶ〳〵もべべ近年三都にも芝居おべ〳〵おこちべるに。とこもにあべちべべ。役者は多く大坂に住居を。づもにも家作をちべ〳〵えあ。この外いかを藥師。御靈邊所々に小芝居あもど。大坂の中芝居まい及もぶ。葭簀張多〳〵。

（六十五）京師の評。附風俗の圖說

夫皇城の豐饒ある三條橋上より頭をめぐらして四方をのぞ
むべし。緑山高く聳く光ぐ〳〵び。加茂川長く流れて水きよ
らかあり。人物亦柔和あ〳〵。路をゆ〳〵もの爭論せぶ。家にあ
るもの人を罵らぶ。上國の風俗事々物々自然に備たる。予江
戸に生れて三十六年。今年はじめて京師に遊ぶ。暫時俗腸
をあらひ如。

京のよかものの三ツ　女子。加茂川の水。寺社。あるきのみ三ツ。人氣の吝嗇。料理。舟便。たゝるもの五ツ。魚類。物のうひ。よかせんじ茶。よきたべこと。實ある妓女。

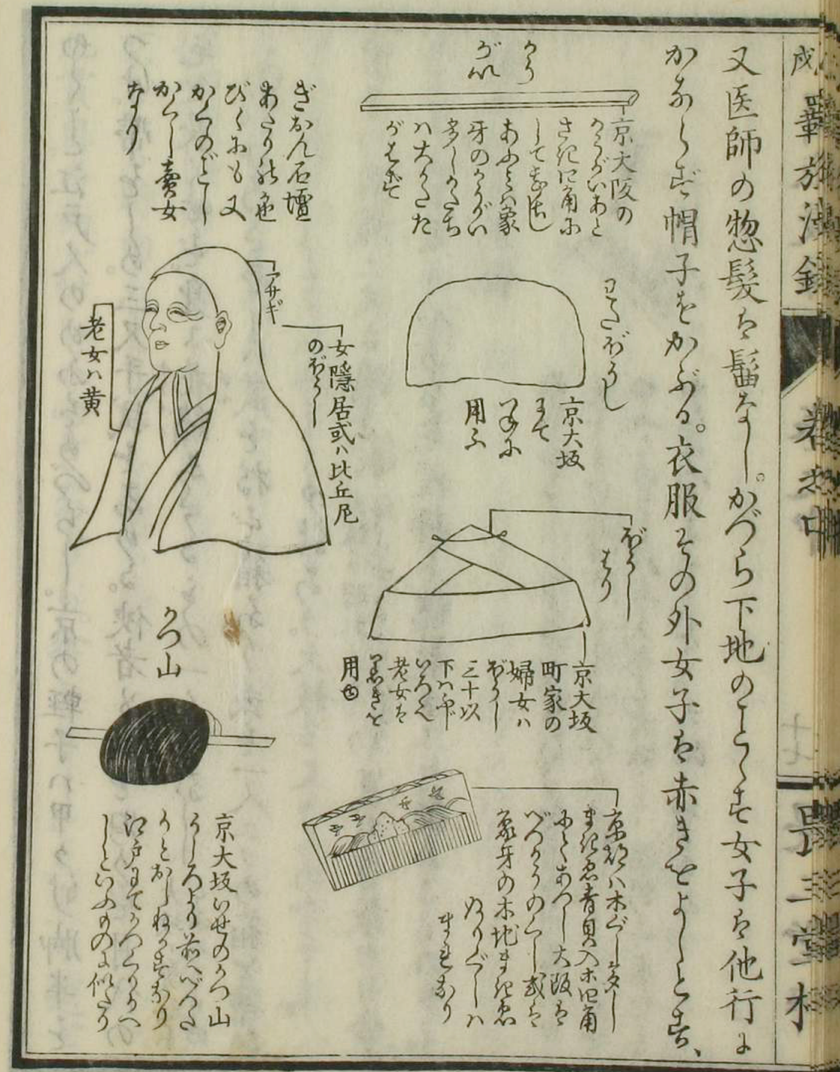
京あるゝの雨天も合羽を着ず。合羽を着ずば人必遠行をすると。あめふりこゝを雨の横ふゝびまつ直ふ降るゆゑあり。ぼてゝふりの商人甲掛脚半をつけ。帶を後まゝ結ぶゝのゝ。やゝ。おんだんやゝ。ゝぶらゝゝ。おどよびあるゝ。これも結わしし車を牛ふひらゝ。人引くゝゝのまゝ。一人先ふまゝゝ縄を輪ふゝゝ。肩ふさゝ入レまゝをひゝ後より押ものの又声をゝゝ名古屋いせ又ゝゝゝ雨中傘をさゝゝ駕をゝつぐゝのあり。予伏見より京ふ入る時雨ふまゝり。予が荷を持ゝ人足傘をさせり。凡八九貫目の両ゝけをかつぎあゝゝら。傘をさゝて三里の道を

やゝゝ。江戸人のめゆをめづらゝ。京の軽子ハ甲ゝけ脚半をつけ。帶をゝめ。三尺手拭をまゝある。侠者ハ額をぬゝゝ。月代の毛を長ゝせゝ。身ふ花繡ゝゝる。大坂ハ髪結ふどふゝりのゝゝゝあり。せゝゝまゝゝハ笠を持ゝ。或ハ一人二ツの箱と擔ひ一人ふほゝゝとよびわゝゝゝ社あり。大坂ハ又ゝゝのゝゝ。男子の羽織二尺ふ過ぎゝ。大坂ハ羽織のまゝゝ神とすゝゝゝひあり、夏ハ白張の日傘をさゝ。菅笠をかぶゝゝ。医師ハ總髪。画工ハ髪ゝまゝの多ゝ。

髪ハ海老尻髷

ねをゆゝゝゝてまゝのゝひゝをゝゝゝ。あゝのゝ尻をまげたるゝゝ。きんゝ元結二ツけてねゝゆふこのゝゝれあゝのゝと大坂より流りたゝあゝゝゝゆひゝゝまゝゝゝ大坂ふあるゝゝ

又医師の惣髪を髷なし。かづら下地のこうもり女子を他行よかるこうもり帽子をかぶる。衣服その外女子を赤きとよこうもり、



六十六 太秦の草紙

太秦の草紙を。室町家の時の戯作春画あり。原本を今出川相國寺よりあらためそのうつし一巻。橋本經亮うしよりのこめよとてをこしあり。けるを。文面首尾せざりうれいうつしとゝくよめる。

たゝ秦のうれうふけ紙屋川のせゝたのとうらゝまろうれ
ゝ若ゝしぶ佳ゝのふくきゝ木もゝ草もあゝぬもゝたのゝとい經亮

六十七 旅の盃 附大文字の火

文月の便りさへ。遠き古郷のことわりひあぐら。蒐まつるぢ。をを京よりのり。十三日の夕つゝる。

旅の盃ゝうふよ神の来る夜の邪
わゝゝゆゝべゆゝ山ゝさゝもれ待ゝ。ゝゝうふけゝうゝてゝゝ

つゝそゝしける

古ゝのゝゝまゝゝ山のゝあゝきゝゝ人ゝ社わゝゝゝ歌ゝをゝねゝらゝをゝさゝりゝけゝう
ゝ若ゝ枕旅ゝ。あゝいゝなゝきゝゝゝゝゝゝゆゝゝゝんゝいゝさゝゆゝきゝてゝねゝよ 經亮
つゝゝゝゝゝ子ゝゝゝゝゝ世ゝゝゝゝ月ゝゝゝゝゝゝ

狂哥

かく汁火をこの比山の大の字ち點のうくまぬるぐめありけり

あるゝ〜そうふれうくれ火

ほのゝとあゝもとのくたくまふ山うくれあれをゝをおのふ

畑橋洲子（法印医学院畑柳安男 通稱柳泰 好詩文）の話ふ。東山大文字の火を。延德元年七月十六日。將軍義輝追悼の爲ぞ。めてあるをあを。あを冥土光明の故あり。義輝前年正月十六日ふ薨を。故ふ今年初てあのことゝ。大文字の筆畫（ヒツカク）を茲船庵の筆也。そのこと今出川相國寺の傳記ふ。世ふ弘法の筆。或を横川（ワンセン）の筆と云のゝふ誤あり。相國寺日件録ふゝるあちのハ抄書せるふやうの事ゝつぞ。今現ふ相國寺庫藏中の日件録ふいろのこと。ゝつ。甚ぞ珍説あり。予先年著述せ〜俳諧歳時記ふハ横川和尚の筆とある〜ぬ。今ふ至り〜遺恨ちくれうちぞり

しふ。ふ〜日又橋洲子より文通のつひでふ。大文字火の事慈船庵を存〜違ふくゝ生い。相國寺小補軒横川和尚へ足利將軍命せらるゝ〜ぞ。世間普通の説ふ〜めづら〜からぞ。大ふ臭を申參りたまぶ。小補軒當時荒廢遺趾而已也（下略）かくう〜あひぬ。

（大文字火を十六日夕方より同時ふ火を点ぞ、誠ふ一時の壯觀あり、と卜めふ妙法の火次ふたり文字の大字次ふ大文字あり、十六日昼より雨ふり黄昏ふ雨やゝぬ。ちるまでゝ今夕大文字を火をゝのぞ、十七日の夕火を点ぜり、その餘をゝふ十六日ふてあり〜。昼より薪をつゝをぞ、夕ゝと一時ふ火を点ぞ当時の農民の山すりうり火を点をゝぶゝあゝ〜ゝ〜ゝを下るの〜久〜〜山ふあるものゝうならぞ病むゝ〜陰鬼のかゝぐゝら集るゝや

凡精靈のむゝひ火ゝり火をゝふ加茂川辺ふ出〜麻ぐらふ火を點ぞ。そ他宗旨ふようて日限の遲速あり。盆中家〜ふ挑灯燈籠と出ゝ〜と江戸の如〜。東山諸寺の高燈篭を星の如くゝ。

六十八 六道の槙（まき）うり

七月九日六波羅及六道の槙うり。江戸人ゝうめづら〜。槙ち高

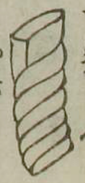
野植ゐ〜かゝのとし

多賀の人必ず一枝づゝ買ふゝ持佛の花いけ〜さる。江戸のおとゝ〜

盆の草市とゝのゆ。

（六十九）おらんと

七月十日清水の四万六千日いとゝあぶたつ。此邊もぐゝおとゝ餅を賣る。これハ挽餅ゐ〜白と黄あり。形



かゝ〜ぐゝねぢまつ。音羽の瀧の赤〜糸のしとゝ。傍曲よりあづけたゝるゆや

（七十）京の盆祭

京まても盆まつりといふことなもど。江戸のとゝあらなら。魂棚も机やゝのものを設け其ぞ無畧なり。さゝげのもろ〜せぬ揚ゐゝ。十三日ゐぼとのちをあらゝる事あり。

それも稀なり。盆中羅齋弱法師のたぐひもぐゝ物ゝひ来ら。但六齋念佛ハ大勢あゝ〜ゐり。

（六月六日佛の齋民家ハ殺生をならず、大人ゐ兒ゐ〜りあゝ）

〜紀伊ぐちをゝ〜ひ市中をあゝいすげ。ゐどつぐとやぶをたゝをきたゝもあり。京まゝ女兒の盆おとりとゝ〜ゝ〜ゝ〜

（七十一）内裡の御燈籠

七月十五日禁裡の御燈籠を拜見ふまつる。こゝ日ハ諸人も
るきんゝ禁中へまいるなり。清涼殿の廂ふ御燈籠をならべ
ゝ前後警固の役人付そひ〳〵一二間ゝ有〳〵こゝより拜さ〳〵む。
らの日ハ紫宸殿の御門も〳〵きをあり。（是南門あり炎上後別ふ南門あり）諸
人うちを拜〳〵て賽錢を投るものあり。日の御門（諸人ハうちよりかうちつゝる）の外
ふ茶店あり。檜垣の茶屋と號ス。又公家門の前の茶店を檜
垣と稱ス。こゝハ江城の下馬先のごとし。茶店を甚むさ〳〵しけ
れどもその名をおめづらし雅なり御燈籠ハいろ〳〵の人形造り
花ふどくさ〳〵あり。下の臺ハ四角ある燈籠ふ〳〵白きかみを
ちり。上ふ赤と青との紙をつけ。是を四方ふすげをり。火を下ふ
ともをあり。炮竹ふあり〳〵下ヶ札〳〵。親王家攝家の名を

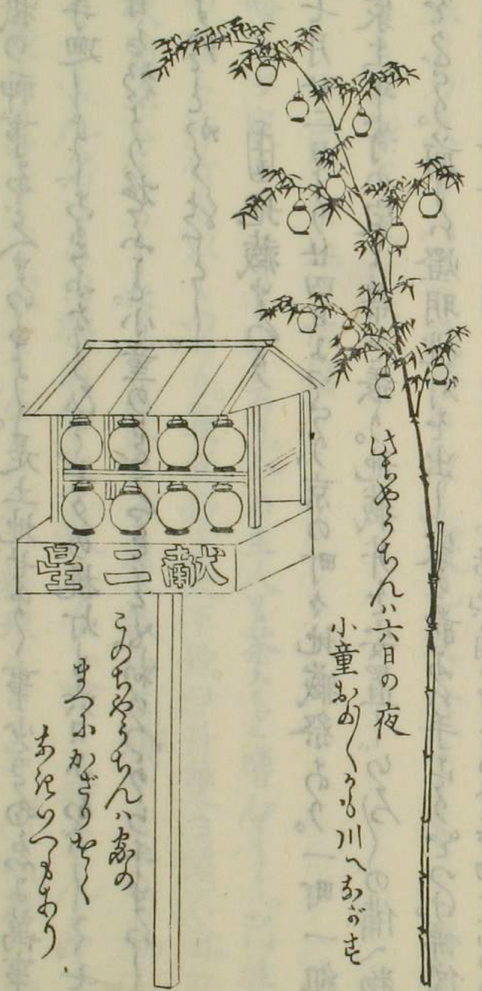
ちるも〳〵。又女中方とかゝるもあ
り。いづれもさ〳〵けのとゝ。
翌十六日そも〳〵下さる〳〵
となり。（ちゝの事ハ今日とゝ
ろうを法ろうえせ〳〵む）
日の御門ふの日八ッ時ごろよ
ひらゝ。七ッごろふ閉る。七ッ
過てハ拜見をゆるさもゝ。七月十七日橋本肥後守經亮ゝ
消息〳〵て禁裏御所御燈籠の造り花きゝり四五本おくりこさ
もゝり。誠ふ一度
叡覽をへゝる品ふもゝ。ゝもゝ尊むべ〳〵。京の町ともよ〳〵
所縁あるものあ〳〵ねゝ拜受をとなるとゝてゝれゝら
やゝけり。京の俗の説ふゝもゝを家ふおけゝ賊入らゝゝふ

(七十二) つるうたう太　雨降ふ出るれば者く

(七十三) せんぞ萬歳　これも同し

(七十四) 京の七夕祭

京ふ〳〵七夕の星の手向ものに。ちひさ紀鬼灯挑灯をいろ〳〵とも
る〳〵笹ばらくつけ。小童六日の夕〳〵これを長紀竿のうらふ
結ひつけ。そは手迹の師の家の前よりもち出紀。暮て加茂川江
のぢ出るまを流も。三條五條の橋の邊へ流ものを禁ぞ。
故ょ二條四條の河原に數十人件の挑灯をとも〳〵つるもあり
さぞ。さなでゝら星のあらふぞ〳〵。短冊に哥を書〳〵笹へつくる
ものもどのづまもる挑灯を附ざるへす〳〵。又を七月二日三日ご
ろより家のまへふ燈籠を出し。これふ獻二星あど紀字をうご
のぢふ紀。上ょ小なる挑灯を十四五つゞく出したるもあり。



そのうちに。

二星を祭るの挑灯。七日の夜あどさぞ〳〵。六日よあどもそのい。
京の風俗なり。もべ〳〵京ものを五節供の諸拂等。昼の内よかうづ
け。どうふ来〳〵ざるかけい持ゆ紀く勘定〳〵。當日夕方を俗事。

のらんぞ斤斗を夫より遊ぶなり。歳暮も富るものハ廿四五日。
まづ〳〵祝ものハ廿七八日までハ悉く家事をいとなむ。正月のことハ
ゐど大〻〻設ゐ祝〻〻大晦日を閑暇ハ〻て。今夜祇園げづり
樹の神事ゐどゑまつるまゝ。是土地せゑ〻〻事少きゆゑ萬事
手廻〻よ〻ゐまもゐを〻〻ひ〻。七夕の挑灯も六日ハゐど〻〻。七
日を祝より祝ふと。小童のうぎゑまもとゐ。ゐのづのら手まつ〻
よ祝とゐ〻〻ゐど〻〻。

（十五）地藏まつり

七月廿二日より廿四日ゐ〻〻。京の町々地藏祭あり。一町一組
家土年寄の家ゑ幕を張り。地藏并を安置〻〻ゐ〻〻の備へ物
をゐざり。前ゐ燈明挑灯を出〻。家の前ゐ手ゐりをつけ。佛像
の前ハ通夜〻〻酒ゐりゐをぐり。活花、扇ゐけその外品物をゐつめて種〻ゐ品をつくり家毎ゐ飾ら

喰々堂名ハ謙字ハ良吉、池大雅堂の門人ゐ〻て、書を能〻、又画をもゐて、頗る風流の人ゐりとゐふ

ゐ〻町ゐあり、年中町内のゐひ合せもゐゐ日ハゐるとゐふ。そのゐりさま
江戸の天王まつりの仮宮の如〻。伏見邊大坂ゐいもりゐ〻ゐる
ゐもゐゐあり。

（十六）京地の酒樓

喰々ゐ家を今猶東山ゐあり。今の主人ハ茶ゐど嗜む〻〻。門柱
の聯を庁竹を以〻つくる。我酒妙々天下妙。伊丹雙白價不渝。の
數箇字をゐら〻〻たり。その外のゐゐハ板面泯滅してよめぞ。こ
ゐ〻まんゐや〻〻の田樂名物ゐり。麩もよ〻。喰々ゐ時ハこんもやく
一種ゐりけるまゝ。今をこのゐゐ外の料理もゐるゐり。○祇園の梶
子ゐ茶店今ハ跡ゐ〻。○大雅堂ハ東山雙林寺中長喜庵の向
ひゐあり。是を七八年前ゐ建〻所ゐりとぞ。料理を〻て鬻く。瓦
ゐハ大雅堂の三字を篆〻。家の作り〻も甚ゐ俗ゐるゐゐ。案ゐ相

違ひて人ふ問ふ。むかしの大雅堂ハ祇園のかたちらふなり
しゞ類焼せり。今のあるゝを哥妓あるゝ。空〳〵大雅堂の
名をあるとゝろのみ。いろさふ家作二階等の物数寄。その俗ある
こと丸山の料理茶屋よりおとれり。
○丸山の料理茶屋のなるゝを。法師ふ〳〵肉食妻帯あり。じ
づもる何阿弥と稱ス。座敷庭奇麗あり。料理もよ〳〵。浮瀬ハ
かとゝろ〳〵僅ふ一軒あり。大坂の浮瀬を猶繁昌せり。
○生洲ハ高瀬川をまゝふあてたるもの。夏をもぢ〳〵。柏屋松源ふ
どもやる。柏屋を先斗町まゝ出店あり。松源延年客多〳〵。ま〳〵
ま〳〵鰻鱧(ウナギ)あ〳〵ひ鯉名物といふ。魚類を若狭より来る塩小鯛
塩あらび。近江よりもてくる鯉鮒。大坂より来る魚類。あつい
多く腐敗を。鰻鱧ハ若狭より来るゝの多〳〵。ゝるもどゝも油つよ

く。江戸前すハおとれり。鮎鮠ハ加茂川あ〳〵とるゝ。ゝ疲て骨こ
ゝ。鮠いよ〳〵。若狭の焼鮎よ〳〵とつゞ。岐阜あゞら川の
年魚ふどゝふたる。呼の口ふ〳〵い中〳〵味あ〳〵。鯉のあ〳〵せゝも
白味噌なり〳〵。赤味噌をあ〳〵。白味噌とゝふりの塩氣ゝ
甘たる〳〵をゝらふたる〳〵。田樂つるゝの白味噌をつゝる
あ名江戸人の口ふい食ひゞ〳〵。鰻鱧ハ大平なゞくゝる。小串
い焼〳〵玉子とぢゝもせり。大魚の焼物ハ必片身あり。皿ゝ下
ふなる方の身をそゞ〳〵とり。外の料理よつりふと大坂も又ゝ
ゝゝゞ〳〵。京ハ魚類ゝ多〳〵き土地なるもべさもなるゞ〳〵。大坂
ふ〳〵片身の濱焼ふと出たるとつゝるゞや。見ゝのゞゝら費を
もぶ〳〵人氣のあ〳〵〳〵むるゝの紀。京ゝて味ゝよりの。麩湯
皮。芋。水菜。うどんのゝ。その俗ハ江戸人の口ふあたゞ

○祇園豆腐を。真崎の田樂より及ぜ。南禪寺豆腐を。江戸の豆腐より。もおとるもの。まるまるでも店上廣〳〵そびゑ。そなたの奇麗あるとゝ江戸の及ぶとゝろ。ふの〳〵ぞきべて京の茶店ハ。四方一間位づゝ。まるまる。左右ふきゝれをさげゝり。名古屋の七ッ寺の酒店なども。をなじ。

○祇園より孔雀茶屋あり。のろ〳〵の名鳥多し。名ちやの名宮ハ惜為を年孔雀茶屋と号す

○大佛餅を。江戸の羽二重のちふ似く餡をるもふつゝめり。味ひ甚ぞ佳なりゝいろ〳〵ちまぎとりあゝものゝ。黑砂糖製ふく。よか〳〵ぞ。その外安りのゝ。挽米のやぎのちまり。上菓子をよ〳〵といつどゝ。價大より尊し。

(七十七) 河原のすゞみ

納凉を四條二條の河原より。四條より義太夫或をゝせもの多いろ〳〵あり。二條河原より大弓楊弓ゝせ物もあまど四條ゝ。あるまでも河原を昼ゝ炎暑ふ石やけ〳〵。ほてりつゝざさめぞ。流をふ水ゝちゝ。人ゝ〳〵ゝまべかりて二條四條より。孔ふ茶屋酒店茶屋川より床几をふ。穆〳〵の料理をひき。（四条二条を茶店の〳〵ちゝ。納涼の人弁当をのちあり。）て。河原ゝまひらゝゝぞ〳〵京師の人ゝ。北山よりあらぞ弁当をのちあり。爰〳〵きりのゝ仲の皮より拵りめ。そつゝてのちゝ紀店物をゝらゝぞ只店上のものをゝらふものゝ旅客と祇園ゝ漂客のゝ。ゆゝふゝ。茶店ゝ。茶つぼ〳〵。一人ゝ。ゝ。ゝ。

物をうち破るに愁ひあり。故ふかくをぢとくもの。京の人の狡ふるとこと是まて知るべし。

(七十九) 洛外の古迹 附近江八景

七月七日。むかしさの。上賀茂。北野へまつまつり。北野ふく。

思ふとかくふりつしてぬきまつる杉の葉の筆梅の枝に軸

帰路千本ゐく。雷おそくかなりて。夕たちぬまべづぬまよぬまてかつりぬ。

○下賀茂柊明神まい。柊の木多し。志願成就の人ハ必ずこの社頭に柊をたてまつる。たとへ餘の木をもてきて植るといつとも。程なく化して柊となる。予七月八日賀茂に遊びくるる請ふて。りつくの半柊に化したるを一枝手折くかつりぬ。それ外南天つくしの柊に化したるもあり。或ハ枯ぬ或ハのちらぬ柊ハ化しそる故手折らぬ。かくる神木をいとうちふ折らんまと。かくまとあるにふしもあるかねど。携へかつくそれ奇瑞を人まえせるを。遠きにつまる人もいまゝ信をまさんとうたがひなれば。此まを神ふつぶまりて。こまをとまれまり。

○まれとも神やゆるきんくるにひらにくさしてかるにつまふ

○七月九日宇治へゆにくり。今日上醍醐下醍醐邊稲荷山。ふじの森深草。東福寺黄檗ふど。道まぐら一見をハ幡山崎邊洪水まて。ぬまぐさ道甚あまたり。宇治橋を三段に切まて落。通圓の茶店ハ床上四五尺も水つきしとそ。興聖寺平等院洪水ふ入て。路難儀あり。離宮を高き故水難ふ。橋姫の宮を流まて跡ふ。

○和泉式部が稲荷山ふ古歌をぞしるといふりくぢい山上七八町ふの谷間まつり。古木ふり。地理を思ふに田中の社

落柿舎ハ俳人去來ガ住シ草庵ナリ。この人名ハ兼時ト云フ。長崎の人向井元升ガ二男ニシテ若ウシテ洛ニ住ミ芭蕉翁の風流を学ビ、俳諧ニ名アリ。宝永元年九月没セリ。

のかつるさとのまぢ。昔は木すいの〳〵ぐるづ〳〵。

○七月十一日嵐山ニ遊び侍り。渡月橋も近日の洪水ニおちて。川上七八町ばかり〳〵渡し舟あり。大井川の石及び紙屋川の石ふじ。ばかり拾ふ〳〵かつりぬ。秋暑ふたえぐれば。終ニ佳品を得ぜ。この辺の石細長〳〵して文鎮とあまぐ紀物あり。

○嵯峨ふ〳〵うもし紀ものは。廣澤の池とあ〳〵山あり廣沢ハ佳景ナリ。嵐山を絶景ナリとて侍る。

○さゞ波落柿舎ハ。二尊院より四五町間道藪の中ニあり。土人もまらぼ。今をのる人もなし。その地主も農民の得とある。座敷二畳ニ勝手一畳ばかりなり。

柿の樹や月もかるるる柿の庵

○えてうもし紀ものハ瀬大原の黒木より。鞍馬のつるめを。

大原女のさうさ脚半ハ。むかふ方ふ〳〵脚半をはかせも〳〵なり。女の牛馬を牽〳〵ゆきもるさぼ。まるさめづらし。

○えて〳〵かどろうもぬるものハ。東西の門跡あり。奇麗荘観言語同断。誠ニ美盡して世界の金銀もこゝふあつまるかとうたがふ。

○えて〳〵ぎ紀りの禁中ハ。さ〳〵ふる。京ハ。上下加茂の社。公卿の參内

○えてやさ〳〵きもし紀。つぎ着たる女。

○えて〳〵ぢ紀もし紀。たゞぢものハ洗井。ハ川の流を

○虫き〳〵ふ紀。さ蔦ハ系ふ〳〵。嵯峨ハ。ぢ〳〵ぢ辺ハ。ようけまど

○に紀ハ。あ〳〵山の禁大堰川ふ〳〵ぎ〳〵。ぢ〳〵ぢ。ぢ〳〵ぢ。ぢ〳〵ぢ。

けまぐ紀のようえゆ〳〵ぢ。

○鳥部山を。今もあとまでなり。此邊袖を多〳〵。御廟野もいとさみ〳〵。東西の大谷甚立泯かり。

○ある谷越を。いつも山水山路ふ流を出く名の如〳〵

○妙心寺の松を甚ざよ〳〵。四方ふ枝をうつと十四五間ある れども一の〳〵跨の松まあるぞ。

○鹿苑寺の金閣を甚ざ古雅なり。義滿の像生るが如く威なり。よ紀石あまとなり。瀧をとろ〳〵。[金閣あるえの北一人より十人まてふ浪ぬありこまこと寺]

[俗ふ投ぎまこ八刹屋の門をひらく、東山浪閣ちもまさめ〳〵のごとし、]

○智恩院の傘を今猶骨ぞろふなりて。本堂社宮の方の彩下まなり。

○大佛の鐘も大々れど。智恩院のうわまきをうかちひらく〳〵。雅あらぞ鐘の響よ紀ふ祇園是第一なり。

○大佛の燒跡。その大きそうんと。柱のうかゝのと礎と佛の臺坐のゝ。耳塚をうそふ昔をかぞろ紀。太閤の廟をうそふ昔をあのぞまと侍る。この辺町家のうゝろふある。繼信忠信が塔。苔むゝてとあまをなり。

○三十三間堂の觀音。諺のとく數多〳〵

○高臺寺の萩を。大坂より帰路京ふ來ゝ〳〵時うそゝ。

○近年京ふゝまやり神を。赤山明神と。深砂大王ふり。赤山ハ叡山の麓さゝ越の丑寅三四町まあり。深砂を上醍醐ふあり。此神去年開帳已来のまやり神ふりとつふ。神體鬼形亟幅ふり。是三十番神のそ紀一ふりといふ。祇園のおやまげふ子奉納の挑灯なまとなり。

○七月十二日小倉山ふ遊べり。楓もいまぞ青ゝがちふゝありき。

一木ゐ〻木梢の少〻色つけるをやり〻手をり〻笠まつけたり〻ふ。道まゝかゝ〻てうゝゐひぬ

もべゝ京都の神社古迹等を古人もこれを抄出し。又近ごろ都名所圖會とゐふものゐ圖説ゐつゝそれぞこゐあるべし。只おのもぶゝゐふよゝとかりつゝ少〻中付わのゝ。

○近江の三上山を出來のゐる紀小冨士あり〻〻の比良いゐたちへゐつゝ。叡山愛宕もたゝゝゐゐ。

○七月廿一日未明ゐ木屋町の旅宿を出ゝ。この〻峠の松ゐゐゐきけり。吉田の神社をゐもぐらわし。白川越ふゐゐ。峠まゝ湖水を眺望も。白川の山中所々まゝ石をきりゐ出も世ゐゐ白川石られなり、

八条やゝほゝゝゐゐ秋のいろ

凡そ湖水をあもゐで予ゲめふゐ所の佳景あり。就中白川の峠よりこもをのぞこゐもべ。左ゐ若州の諸壑遥まそびくむゐゐ。伊勢近江の山々波濤のごとゝ。足下ゐかゝ〻峠をゐゐゐ。左ゐ三井大津粟津石山等ゐゐ。矢走片田の辺。晴もれる日をかすゐゐ浮御堂もゐゐ〻。遠〻ゐも薄ゐ及びがゝ。述るゐも詞ゐ尽もまゐゝ。湖を浪ちづゐゐて席を布るゲおゐく。船を帆をあゲ〻一葉水ゐ浮ぶゲゝ。山水の奇絶ゐゐ於くむゐ〻〻口を閉づ。

○ゐ〻崎の松を北より南ゐさも枝凡三十間ばゐり。東より西ゐいたり廿間餘。ゐきゐ三かゝゐゐ。木の丈け高ゐらぞ。まん丸ゐ茂生も。是亦天下の名木。實ゐ一奇觀とつべし。

を以て石垣をつき出せしことあり。是は[illegible]目あり。修理しめ[illegible]松の木[illegible]ふ辛崎明神の社あり。小社なり。或人の云、市の祝こゝに非なり。[illegible]の書を引用るに[illegible]ふ[illegible]。その[illegible]と敏山の記録まあり。とゝ[illegible]木たちのまゝ百年来のものゝ[illegible]。傳記なを考へべし。

坂本山王に詣るふ便りよけもど。秋暑甚し〳〵歩行ふたくもぞ。から崎より遥ふ山王の宮居を拜し。舟ふのり〳〵三井寺へ参る。これより石山へ二リ半あり。終りゆゝぞ〳〵て京ふかへりぬ。

(八十) か〳〵家の札

京ふ〳〵か〳〵家の札い。必ぞ子供ふかゝせ〳〵。札を横ふ戸へもりつけそ。かゝもれば家の家ともゝ〳〵ふきがるといふ。何ゆゑあることを志らぞ。[illegible]りのごと〳〵。

(八十一) 京市中の喪 附名古屋 伏見

京ま〳〵忌中まち。店上ふ黒き暖簾をうける。江戸ふく簾をうける類あゞし〳〵。黒を喪服の色なもとゝ簾ふまさもとり。忌中の札除、無地の暖簾

をうまゝゝ人をゝ〳〵表あるこゝをあつ〳〵ふりらぞ。名古屋ふ〳〵市中の葬礼ふ棺槨を禁ぞ。駕ふ白布をもるかり。伏見ふてハ棺甚立派あり。棺を擔ふ者ふ至るゆで。悉く社祢を着そ。四方ふ紙の天蓋幡等をゝて。上下を着たるもれこゝまゝを捧〳〵持あり紀。鉦太鼓を鳴ら〳〵。法師両三人棺の先ふ立ち〳〵こゝまゝを導く。身分よりつきをのゝ〳〵ぞ〳〵もかゝのごと〳〵。是土地の風俗あるべし。

○伏見の桃山ふく。名のゝ志れぬきのゝとゝ切山陵の邪

(八十二) 女兒の立小便

京の家々厠の前ふ小便擔桶あり〳〵。女もそもく小便をもる。故ゆ。富家の女房も小便を悉く立て居てもるかり。但良賤とゝ紙を用ぞ。妓女ぞりふゝろゝとりちく便所ふあ〳〵なり。

月々六角わしづくこの小便桶をらゝふ者なり、或を供二三人つれたる女。道ばたにこの小便たぐへ立かゞら尻の方をむけて小便をするふ恥るいろあゝ笑ふ人あり。

(八十三) 女子のぼうし 附伊勢尾張

京大坂伊勢あゝ。女子他へ出るふいろ〳〵ぼう帽子をかゝ。尤帽子ゝゝち少〳〵つゝもまり。圖いまふ出づ京大坂の綿帽子を結ぶぞ。そのさま〳〵げの化物のごとし。名古屋を綿をゝぶり腮(あご)の所ふて結ぶ。いろ〳〵えゞる〳〵。京ふ〳〵三十以上の女を淺黃帽子四十以上を藤色の帽子。老女を紫或を黑。是京の風俗あり。凡女子の帽子をつゝゝとゝいゝ〳〵の送風あり。えゞる〳〵とゝいゝ。江戸の女子の素面〳〵他行をるふをまさわり。

(八十四) 粟田の陶器

京都の陶器。粟田口よりゝ〳〵。清水をかゝもり。白川橋ふ松風亭と〳〵ふ店あり。大坂蒹葭堂ゝの〳〵れこんろきゝゝ等を製せ。又一軒旭峯といふ店あり。宇治の通圓ゞ店ふ〳〵ひき〳〵茶碗を製せ。こゝゝ二軒器物をゝ〳〵ゝゝの多〳〵。

(八十五) 京師の人物

京ふ〳〵今の人物を皆川文藏と上田餘齋のゝ。餘齋ハ浪花の人ゝ京ふ居ゝ。ゝゝまでゝも文藏を德行あらきるゝ〳〵少。秋成を世をいとふゝ人とゝ〳〵ゝゝ。蘆庵を古人ゝゝゝぬ。画を月溪と雅樂ふのゝ。蘆庵應舉むもを〳〵むゞ〳〵。

凡京師の文人見識甚ゞ高上。情才ふ過ゝゝ。文學の事京師の外ゝふ村學と称ゝ。ゝゝまゞゝ見と說話をるふ。三ッのうち二ッを甘心ゝゞゝ。ゝと多〳〵。夫都會の人氣ふのゝゝゝゝかゝのゝと

しとつゞも。京師むも甚し。文人多くハ風狂放蕩。是まことの地の一癖のこと。京の人ハ滑稽ハ、自笑其頑と、近年胴脇とのこと、むべあるかな。もせ紙も茶碗と能浮と、家の花ハ家とのつり。

○京ハ行ゝ日。居ぐるとあるゝ人のこゝとゝてつゝ行げる。

ちゝりおきゝ　そのこゝの茶ハもあゝ　世やうれゆゝ人のふゝもゝつゝ

○今上方ハゝ人口ハ膾炙する歌。

こゝゝゝハ熊坂あんの松ゝをたゝうれいよある　秋成

風さゝこゝゝゝゝゝゝや　松をゝちゝきさぬ世代まあをもゝ紙花園

おゝゝこゝゝを

ゝゝゝゝゝ物ゝの松もゝもハゝ何ゝゝハとゝをぬもゝん

祐信ハ市人のゝゝをゝるかゝゝけゝゝ　秋成

未つひハ海とあるゝき谷水も赤もゝいゝる赤のゝゝうけ

ゝの歌蘆庵ゝゝゝゝもつゝ。未詳。蒿溪云ゝの歌を伏見中ゝ茶の隠士茶丹ゝ茶ゝゝ赤ゝゝ木の茶のゝゝ

ゝゝるゝゝとのハ下のゝを茶ゝ庵ハ隠ゝ茶ゝゝ。

○本居宣長。三夕の中定家卿の歌を難して云。こゝゝゝゝせば花もゝゝゝぢもなゝのゝけゝとゝのまでハ。海辺のゝゝゝなゝゝければ

秋ゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ

きゝふ。疵つゝこの僅ふ三人ありと。是實說ありとのふ。人おりゝ
らゝ七十人をあまりふ多し。この話のこと文次其實を得たりと。
明日高槻より人来る。則喧嘩のことをきゝふ。疵つゝこのごとふ
七十人。衆絶倒せ。
文次嘗ゝ友人を訪ふゝ云。時初春ふして世上詩歌管絃の會初
あり。僕も又啌のつき初をもゝべし。来る十一日午時より。おの〳〵
打つまゝゝ。拙家へ來臨ありべしとかゝ約してかへりぬ。友人
おりつらゝ。文次虛談の會初ふを何をのゝやらん。ぢぢんがわら
しと。本日各打つまゝゝその家ふいまりゝ案内をこのふ妻ぢし
つと出ゝ云。文次ハ今朝より他行と。衆絶倒せ。西村定雅話文次
今猶高倉ふあり

(八十七) 應舉ゝ卧猪 此條兩談ふ出たまい省く

(八十八) 京の浮世繪 附澤庵画賛

祇園ふセイビとのふ画工あり。おやま藝子の似ゝを画くまゝを
をうまり。妓及戲子の似ゝを綿繪ふして多くまり出たまと近
年の新製なり。ちゝまでゝ江戸のふ比ふ及ぜ。
○予ゞ旅宿せ〳〵泉屋変兩ゞ妻。歌妓の圖を画ゝ賛と乞ひけ
まゝど
うゝもむ春のあ遅ふうれひめ打ちかゝること比花も好たまふ
自注ふ〳〵花とのあげ代ゝり四寸ばかり三おたゝ〳〵花一ツとまゝ昼一
夜まゝ花三十朝六つより暮六つまで花十二あり夜も又おなじ
○京をたちける時
のゝとりふかもの川ふ流るる姉のゝまふりうまゝるふの名 野亮
〳〵
呼ゝ〳〵ゝらるとるあまそうりいまるひるたひよ名を思ふん 解
○京ゝ〳〵ゝ〳〵澤庵和尚遊女の賛
佛も法をうり。祖師を佛をうり。未世の僧を祖師をうる。汝を

五尺の身を賣さ。一切衆生煩惱をもつふ。色界是空。空界是色。柳をもとり。花をらもあり

水の面ふよ〳〵ふ月をもとめ。あるを新も殺しもを見をよく人のあるあるもとあるもくくふあるもくあるぬ

同 淀の洪水 撞木町の噂

七月廿四日 京を發し。午時伏見より船ふ乘りて大阪へ下る。泉屋変雨同行。今夜五ツ半時頃大阪へ着岸。この間所々洪水の跡をとゝ駭然たり。淀八幡辺所々の堤崩もを。今專ら杭をふり土を運びく普請も。淀の城の塀を屋根際ふまで水つ紀たりとゝめ。淀むしゝ柱二本あるもく橋桁二所まぐ落こゝぬ。水車を流もをその跡僅ふ殘る。高槻の城又かゝれごとゝとりつ。枚方より二里をりあるゝ點野仁知の間堤大ふ切もを

水突流し。南。平野村ふいるもり。東。駒ガ嶺の麓ふ及び。西城際ふいるり。北。澱河ふ連り。一面湖とありぬ。點野ハ既ふ河内ふ屬もゝ。ゝ紀辺川高く陸卑し故ふ水勢退くあとなく。今ふ至りく濁水大餘。もゝめ水至る時。樓屋梁を没し。樹木梢を洗ふ。村民丘陵ふ登り。或を隄防ふ集る。四方悲〳〵怒波。兒女號哭の聲天ふ遍し。民屋水面ふ泛ひ。その中尚燈し火熒々たるもあり。亦老幼五六人大木より攀そのの根拔く流る者あり。亦その子を畚の中ふもき。樹の上ふ攀ぶ。その子を全ふもるもの紀十ヶ一二のゝ。あふ於て官命あり。舟人をして官京橋の側ふ數十間の仮屋を作り。又道頓堀の雜劇五ヶ所アリ一ハ當時その破損を修理してあり中ふ流民を入れる紀集るもの四千人。則倉を発し

くこゝもとゝ資給しのふ。浪華の富商も又貯財を出しこゝもとゝ施行せ。大小一あゝぐ。大阪八軒家辺水床ゝ及び。天満天神橋そゝ余の小橋損せるゝ所三ゝあり。二十日むゝかゝゝ水やゝゝく減ぜ。氓故地ゝかゝるゝもゝども決口より水入て田地濁水中ゝあり。或ゝ砂礫畊せゝらるゝ。黠野より西数十町堤ゝ竹を柱とし藁を屋根とし。僅ゝ雨露をゝせゝぐゝもの数百人。伏見大阪の客船往來せるゝものゝあゝぐ。十三四歳の童。小舟ゝ棹さし來り。桶をゝゝゝ井へ投入く銭を乞ふ。旅客泫然として袖を濕し。則銭をゝゝ桶ゝいゝくゝゝを流せ。乞者の舟下流ゝゝくゝゝゝ

八文字屋自笑を。不文の俗人あり。その頃京都に南嶺といふ人あり。戯作をなす。自笑作として出板す。自笑といふ名も。これ南嶺がつけくれしあり。外にまた一人作者あり。その名をもれり。其頃これ作もまた自笑作とあり。出せり。故に自笑作とのもの。實に自笑が作するものならぬ。自笑を戯作など出來る人もなし。そのころを八文字屋繁昌して業用なりぬ。只射利の俗人あり。かゝる例をなして俳優の評判記等。今も猶自笑作とあるせり。ふ文の俗人あり。高名とあるもと此人の幸あり。

大阪の盧橘を元京の人なり。この人の話よいとく。其頃を京都大佛のもとに元祖なり。この餅世に賞翫せらるゝ家富なり。其頃才學あり。よく戯作をなす。これを自笑よりの人。自笑作

とゝて出板しけるもの。その本大に世に行はれ。自笑利を射るに。とあるゝなり。其頃も密に後悔し。且名利をのとむるところやありけん。のちに自笑其頃両作のおなじ板にして出板しけるが。その後故あり。自笑其頃確執に及びぬ。よつて其頃その子に江嶋屋市郎右衛門（其頃実名）の名をゆゑりもふ書林をさせり。其頃が自作の草紙を多くなり。甚不幸の人なり。其頃一作とゝて出せり。本を更に大に損をしたり。もし自笑が代作をこれ其頃がもとゝ相違あり。又南嶺とゝひ人を。國学にこれ其頃がもとゝ相違あり。又南嶺なりぬ。これ南嶺も老後に戯作をして。自笑が作として出せり。是をもゝのなり。又自笑も少し才あり。戯作のできぬとのみ人をなりぬ。其頃と絶交して後を。自笑がこゝろ書し

再按ずるに南嶺に多田兵部後に桂秋齋と改名せしに名せ國学者のなかるべし、

もとのまゝ大うたい諸方の合力にて高名おなじく人あり。（此説あるまゝにあるまゝにあるまゝにあ

はるそのあぎ一日を煩ふあり。又一日を額
ふあり。こゝをもて世の人ゆりとゝ[illegible]べり。程経て京都堂上家
の被官浪人〳〵大阪ふ來りて〳〵を扶助〳〵これを男めつけ
ふ〳〵難波新地の辺ふ住しめを紀。扨〳〵ようひくたの〳〵めり。後
うゝ男義ふたゞふ〳〵ゆりとゝ紀怒り〳〵忽追出〳〵是より
又ふ〳〵び男ふなるまぞ。そのゝゝ惡黨無賴の某とのふその法と
あるまゝこゝゆり。このゝゝ大坂ふかゝを居とのゝ。それあるのを
志〳〵ぞ。こゝふ柳里恭 柳澤權大夫 ひそゝふゆ紀をゝこゝふ〳〵。この惡
をゝをさこのさ〳〵むゆ紀程ふくゝゝ惡をゝをゝこゝ〳〵官府ふ出
せり。かゝるまゝより芝居狂言ふ。奴の小まんとゝ紀〳〵ゝり。
秋成ゞふゝのふゆ紀ゞこゝゝ男と。柳里恭あゝと紀せ〳〵。玄
非をゝとつゝり。

按ずるふ。柳里恭の事年代相當せぞ。これも元禄年間大坂
ふ奴の小まんとゝふ女俠あり。それを混じゝふ〳〵べ〳〵。正
慶を享保七年ふうゆまぞ。享和二年ふ至〳〵七十四歳とぞ
八月二日予難波村ふたゞゆ行〳〵正慶尼を訪ふ。正慶尼いぬの小まんゝ法名この
日盧橘同道。則同村の医師鎌田氏ふ就〳〵謁を請ふ。正慶木津
ふ家ゆり〳〵ゞ。居を志めてを人の往來ゝゞらふ〳〵とゝ。その家
を木津の菩提所ふ寄附〳〵。難波村ふ來り人の家ふ寓居をと
つゝゞ。つゆふその所をさたゆぞ。鎌田氏人をも〳〵らせあゞゞら〳〵
ふ〳〵たゞゆふあひぬ。こゞ〳〵つゆふ年七十四と。顔色既ゝ老衰に
とつゝゞ。猶つゆ〳〵の餘波ゝんゆ。歩行動揺ゆゞをゝあらな
り。一体世をゝとふゝゝゆりゝをゝ。人書をのゞめとゝ猥ゝ書
ぞ。予對話〳〵て扇面をゝし〳〵ふゝ〳〵ようけをゝて。詩一篇と

連歌の發句とゝを書り手迹甚ゞ美事あり。

金城春色映丹霞　活氣和風到萬家　早春　三好氏婆　正慶草

潰笑宴然樓上興　捲簾先見園中花

又

[illegible]　丁女丁　一山慶

詩も正慶草とかきべ自作とゝ。言語ものづゝら俠気のりく
ゝづゝのゝふ老婆が忌きらふもの酒客と猫ありと。好事のもの
たゝ〳〵ゝもを愛も。前年蒹葭堂ゝづゝからの用墨のゝゝふゝの
正慶ふ畫〳〵め。蒹葭堂ゝづゝらゝわふ題書も。蒹葭堂形の墨
ゝゝのまゝを大坂のあり正慶を画もできゝるなり。〳〵このまゝゝも
画をいゝ〳〵人のりとめふ應せぶ。大坂の人もその名をよもだゞ只
奴の小まんとのゝよゞり。[illegible]ふ奴の小まんとのふ女俠元禄のひゝあり[illegible]

九十　近松門左衛門が傳　附墨跡

近松門左衛門を。越前の産とも又三州の産とも。つゝ。今の並
木正三ゞ戯材録ゞ云。肥前近松寺の僧の話ふ云。近松門左エ
衛門ハ。元肥前唐津近松禪寺の小僧ゝり。古澗と号ゝ。積學ゝ
依〳〵住僧とゝり。義門と改む。徒弟ゝゝ〳〵ゞ。所詮一寺の
主とゝりてハ。衆生化度の利益ゝゝ〳〵と大悟〳〵。遂ふ行脚ふ出
ぬ。そのゝゝ肉縁の舍弟。岡本一抱子とゝふ儒医。京ゝゝりけゝゞ
ゝゝわふ寄宿〳〵。還俗〳〵〳〵堂上家ゝ奉公〳〵。有職の事も大〳〵記
臆せり。後浪人〳〵〳〵京都浄瑠理芝居宇治加賀掾井上播磨掾
岡本久弥角太夫杯の浄瑠理狂言を著述せ〳〵ゞ。その〳〵ち竹本
義太夫ふたのゝれ。出世景清とのふ新戯文を書り。是近松ゞ義
太夫本戯作のもゞめゝり。是ゝ〳〵ゝを数十部の作ありゝもべく

近松が作を。勸善懲惡をむねとす。衆生化度の方便を戯文中ふくめたり。是近松還俗の日發願のあらむ紀ようなかとのつり。義太夫が作者となりて近松氏を名乗ること。近松寺はたりしいまを[illegible]ぎる微意なりや。文中撰要愚云。こは說ふなれば。この北三井寺門前近松寺破戒の僧のうちなりとのふ說をたゞへるなりや。二代めの義太夫が墓を千日寺にのこり。則國字を以て略傳を志せり。文中に元祖義太夫が傳も少しのせたり。（未る出き）元祖義太夫が墓を志る人なし。予正三を訪ふて近松が墓所を問ふに正三も志らぎ。久々智の廣濟寺の過去帳に戒名あるよし。をうれり。よく正三が耳底簿をめりくあまをそうつも。久々智を神崎の隣村あり。

久々智廣濟寺過去帳

阿耨院穆矣日一具足居士　　俗名近松門左エ門

享保九年甲辰十一月廿二日

阿耨院の法號を近松門左衛門辭世の詠草中ふ[illegible]

○大坂金屋ぞ〳〵銅吹呼熊野屋彦九郎呼藏近松門左衛門辭世の詠草（紙中竪一尺許、横二尺許、[illegible]）

甲男の家ふ生まれて武林ぶ[illegible]

[illegible]

世を捨て世さるるものち數ゝ
紙を揚のまれしゝ　ふねも

近松門左衛門杉森姓信盛
号平安堂巣林子

阿蘇院穆矣日一具足居士

又同人所藏美人の贊　紙中竪三尺余横一尺許
画い土佐筆のもくゝ

樂天ゝ意中乃美人を愛の字ゝ云
傳正遍紹雲詠中の意ゝを綴よこの女
とまかるさまもとれのゝ様ゝの

仙廣云

相生流れ移る世も勢代よりん氣れを
衣裳表ゝうゝくものゝみ勢ゝ

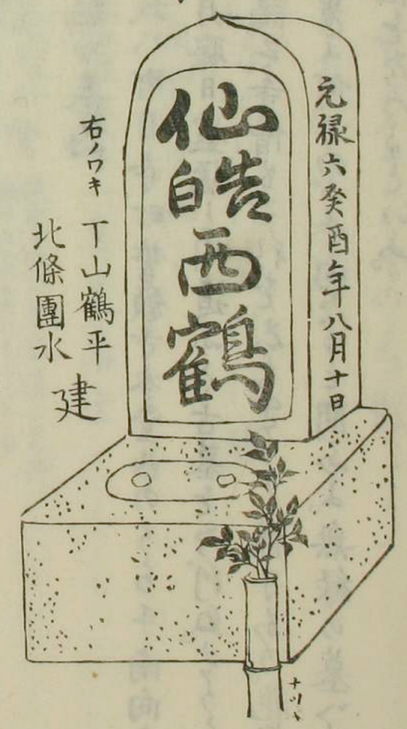
平安堂近松七十一歳　狂讃馬

これも文字を肉筆のもゝ　近松ゞ肉筆ハ大阪中ゝ只ゝの二幅
のゝなゝうゝのつゝ

(九十一) 西鶴ゞ墓誌

西鶴ゞ墓を。大坂八町目寺町誓願寺本堂西のゝら手南向ゝ
ゝり。三側目中程　七月晦日盧橘と同道ふゝく古墓をたゞぬ。もゝら
ゞ西鶴ゞ墓ゝ謁を。寺僧もゝれを志らざりゝ様子ゝり。花筒
ふ花ゝり。寺の男ゝ何りのゞ手向たゝと問ふゝ。無縁の墓へも
寺ゝり折ゝ花をたゝるものゝ。

棹石高サ二尺余
ヨコ一尺臺石
高七八寸
大字
總高サ二尺八九寸



元禄六癸酉年八月十日
右ノワキ　丁山鶴平
北條園水　建

園水を西鶴ゞ信友あり。西鶴没〳〵後。園水京より來り。七年そゝ舊廬を守まり。その〳〵と西鶴名殘の友とゝゝ草紙の序ふゝへゝゝり

追考　難波雀ゝ云。西鶴ハ井原氏。庵ゝ鑓屋町ゝあり。

(九十二)　椀久奉納の手水鉢

椀久ゞ奉納の手水鉢ハ。大坂東門跡のけあゝ書院の庭ゝあり。所縁ゆゝらざるゝゝゝそゝゝゝ。大坂の人ゝあゝさるゝゝ多ゝり〳〵ふ去年杏花翁もゞめて見出さる。あゝゝゝゝゝて人ゝゝゝを。ありぬ。今書院普請最中ゝり。庭あゝて手水鉢義の中ふあり。則ちあゝを摺るゝふ石面ゆゝらゝ〳〵あゝゝゝゝ墨つゝゝゝゝゝ

柳の話ふ。椀久ゞ墓ち大坂八丁目寺町實相寺本堂東南の方ふあり。墓誌宗達之墓〻〻〻の延寶年中ふ没しぬ。墓の傍ふ松ありとのみ。予ゝ此ゝ〻を大坂出立の朝きゝぬ。ゆゑふ實相寺ふたづゆ申紀〻〻〻〻來るゝ〻を得ゞ。尤うらゝ〻〻。椀久ゝのゝと伊勢の人あり彼地ふも椀久ゞ墓あゝと云

追考曲三味線ふ云。巻之三六張目墨羽織の兩股ふ翼ゝのりて足を馬のゝ〻ゝる人々駕より出〻〻一列ふ並居〻中ふ少〻勿体めゝ紀〻る人ハ天和年中ふ女護の嶋ゝ渡り〻〻と聞へ〻〻一代男世之助と云へ〻〻り右を此津ふ名をの〻せ〻〻椀久むゝ〻〻の姿そゝ紀ま〻むゝやゝ〻や天窓ふ立嶋の布子九ゝけのひゝ〻帶革巾着のゝ紀〻ゝら懷ふ伊勢天目吸口ふ〻〻のきせるゝゝゝめんの沓足袋細緒の奈良ざゝゝをかゝ〻ぬゝのゝ扇車の紋所今とゝゝも智恵のゝきさゝのふ顔〻て坐せり下略これふ〻〻椀久ゞ紋所もれ

たり○元日金歳越〻〻〻〻義太夫本ふ。椀久とひやうたんし〻〻と玉屋庄七ゞ事を混合〻て作ゝり。又小歌ふ此ゝ〻〻〻椀久物狂ひを。ひやうたん〻〻〻〻ゞ〻ふ〻り。

(九十三)美濃屋三勝ゞ墓　此條并ふタ霧ゞ墓の事兩談ふ〻〻〻〻〻けゝゝび省きぬ

(九十四)遊女タ霧ゞ墓

(九十五)紙屋治兵衛ゞ墓

紙屋治兵衛ゞ墓ち。大坂網嶋大長寺ふあり。近日の大水ゝ。の大長寺決口ふあ〻り。墓所混亂〻て。或ゝを〻〻流〻或ハ崩たゝ。故ふ治兵衛ゞ墓ちえふゆゝのゞ〻〻〻〻やゝ〻ぬ。治兵衛ゞ家ハ今猶連続〻〻〻大坂ふあ〻〻〻〻〻。大坂今橋ふ今猶紙屋治兵衛〻〻〻紙問屋あり、豪家ふり世ふ今橋のねぢぶぬ

(九十六)淀屋辰五郎奉納手水鉢の噂

淀屋辰五郎が奉納の手水鉢。天滿天神の華表（トリヰ）の傍ふ有りよし。雨柳の話なり。予天滿へ參りし日をこのるをあらび。大坂出立の日ふ聞ぬ。故ふ終ふうけし來らず。椀久が墓と辰五郎が奉納の手水鉢をたずねるふと。旅中の遺恨あり。この手水鉢のことその後大坂木津屋政五郎ふ消息しゝ穿鑿せしふ。絶くあるとつく り。木津屋を天滿の人あゝ。神人とあゝ交もび聞のらせしふをあるべからんば

（九十七）乞丐女六が墓 附評

千日寺の前往來のうたもらふを。種々の墓あり。河豚をらひくし死したる四人のもの〻墓を。下ふ石ゝ大なる河豚のかゝちを彫刻し。その上ふ棹石を建く。四人の戒名をあるしたり。みもらひ一時の戯ふ似たるもど。後人口腹を貪るをいましめあるべし。或ハ博徒の墓あどふ獅子を刻し。上ふ棹石を建たる大造ある墓有り。その外異形の墓あるあと江戸の回向院の如し。大坂ハ一体石ふ富たる所あるゆゑ。石碑のづもも立派あり。

○同所ふ乞食女六とゝふ〻もの〻墓あり。寶暦年中のことあり。此六とゝふ乞食を。頗る見識あるこのふ〻奇人あり〻とぞ。死後大坂の俠者あつまりて墓を建くゆゝ〻ゆゝ〻。その墓敷石二壇ふて中壇ふ戒名あり。上ふを石ふ〻六がかたちを刻し。めんつうをもち酒樽のうへふ立り。胸より上を欠くその六臨終ふ偈を残したるよし。一体心願あゝ〻風狂人とあるもの。甚ど奇人あるけるよし。大坂の人うたれり。安達が原の淨瑠理本ふ六とゝふ乞食女酒をのむとたりしの六が事を書しものゝよし。六生涯さけをこのめり。

六が石傍面白うけ〳〵えつもを或人云酒徒
らの墓の石を粉ゐ〳〵のめば酒をもくむとふ
ものこゝ三樣が墓ゆいつを粉ゐ〳〵てのめば勞疾
を治すと
いつ何
人が言
出タ
ん源
源を
伝じあるるまゝ
俗宿付〳〵あてぶひ〳〵件の數風糸をあせり

九十八 二代目義太夫が墓 附元祖義太夫畧傳

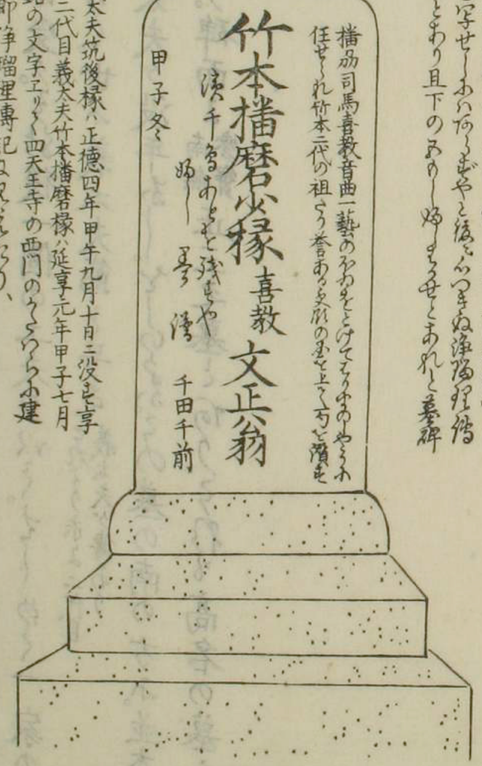
同所法善寺ゐ竹本義太夫が墓あり。られいもゞめ政太夫とゝふ
二代目ゆ義太夫ゐり。元祖義太夫が墓をその所を失ゆ二代目義

再考
二代目義太夫ハ延享元年七月廿五日没ゆ、甲子ハ則延享元年ゐり

又按ゐ義太夫節傳記ゐ
ようゝ〳〵思ゐ
に二代目義
太夫が亡骸
ハ當時天王
寺の西門辺三
葬り、其後法
善寺へも若の
碑を建ゐる
ゐゝ〳〵

太夫を寛延三年庚午九月没ス。その墓三回忌ゐ建る呼ゐり。

追考千田千前ハ竹田出雲ゐり卅甲ゐゝ〳〵もを五口卒ゐゐく
えゝゐゝ〳〵千田と字せ〳〵ゐゐゐ〳〵ぢやと徳ゐつきゐ浄瑠璃
記ゐハ竹田千前とゐり且下のゐゐ〳〵ゐゐもゐ丹せとゐれと墓碑
のゐゐをまさ
〳〵ともゝ〳〵



追考元祖竹本義太夫筑後掾ハ正徳四年甲午九月十日没ス享
年六十四歳ゐり○二代目義太夫竹本播磨掾ハ延享元年甲子七月
二十五日没ス碑銘の文字エリ〳〵四天王寺の西門のゐゐらゐ建
ゐゐり〳〵義太夫節浄瑠璃傳記ゐえゐゐり、
石碑の三方ゐ片假名ゐ〳〵畧傳をゐるせり。長くれいゐつ〳〵来らゞ
その文中ゐ元祖義太夫が傳を少〳〵のせたり

○元祖竹本義太夫い。天王寺傍村の人。名ハ博教。字ハ五郎兵衛号ス二道喜。浄瑠理の音曲を。井上播磨掾。清水の徳屋利兵衛。京の宇治加賀ふ受ケ。そ〻後一個の工夫を以て。そ〻めく一家の音曲をひらく。世ふ義太夫節と号ス。とれより未よ二代目義太夫ゞ傳わり

文中元祖義太夫ゞ没年ふ〻。そ〻のふこの墓の南の方ふ。並木正三ゞ墓あり。碑面よ南無参寶正三之墓とゆり。これも高名の墓ゝ

羇旅漫録巻の中終